

職業英雄「マタドール」

芸林 民夫

前書き：

以前の論文の中でも昔と現在、神話と歴史上での英雄の話しをしてきた。ギリシア神話の中の英雄は神のような超人的な存在であったが、現代の英雄は多少その神聖な要素が薄くなっている。国家主義者の政治家などが自国の全兵士を英雄と言っていることは別として、スペインではマタドール（闘牛士）は一種の職業英雄である。と言うのは、実際に行う事は国家の為ではないが、みんなを代表とする英雄にしか許されていない行為であるから。この英雄と彼の社会的な役割を理解するには、3つの角度から闘牛を見るべきであろう：1) 闘牛の劇（コリーダ）；2) 雄牛（トロ）；3) 闘牛士（マタドール）

1) 闘牛の劇

闘牛はスペインと中南米で広く行われている。ポルトガルと南フランスでも闘牛はあるが、牛は殺されないので、闘牛士を「マタドール」とは言わない。スペイン語で「マタドール」は、「殺す人」「matar=殺す」を意味するからである。スペインでの闘牛観戦の切符は高額で、オペラや音楽コンサートの2-3倍ぐらい。チケットの値段は闘牛のアレーナ（競技場）からの近さ、暑い夏の太陽が照り付ける席か日陰かなどによって違っている。

その高額の見物料金で見るのが、普通は三人の闘牛士が六頭の牛と戦って殺す劇である。ここでは「劇」を述べるのが中心的な課題となる。牛を殺す劇は見ている観衆にはどういう意味があるのだろうか。ただの屠殺ではない事は確かであろう。ここで闘牛を「スポーツ」と言わないことは、競技のような要素があまりないからである。しいて言えば闘牛

士と牛は殺し合うことになるがこれはゲームとは言えない。スペインの新聞もスポーツ欄に闘牛を入れていない。一般のエンターテインメントの欄にも入らない。別の「イベント」扱いになることが多い。

スペインでは闘牛が「劇」として認められていて、闘牛士と牛「マタドールとトロ」の劇に参加する人たちの行動は厳しく制限され、行動そのものだけでなくそれ以上の意味を持つ。闘牛士の動作などには力や勇敢さがはっきりと示され、牛を「牛耳る」事を見せつけ、またトロの恐ろしさを乗り越えた事を“見得を切る”「adorno」事で観客に見せる。とにもかくにも闘牛は決まった儀式であり、その儀式から離れることがあればその聖戦が損なわれることになる。

闘牛は「トレロ」(マタドールとその付け人たち)が「プレシデンテ」の座る貴賓席前まで進み挨拶するパレードから始まる。このプレシデンテは闘牛の進行を決める人物である。その後、最初の牛がアリーナに入れられてマタドールの付け人が大きなピンク色の「カポータ」と呼ばれるケープで数回「トロ」を「通す」。この「通す」とはスペイン語で「パソ」と言い、牛をカポータで誘導しながらトレロの体の近くを誘導し通過させる事。この時の目的は牛の癖をよく見抜き、どう扱えるかを見る為である。牛が突っ込む時に右に曲がるか左に曲がるか、あるいは向こう見ずに突っ込んでくるか、判断してから突っ込むかなど、どんなタイプの牛かを見るのである。その後「ピカドール」が馬に乗って入場して来る。ピカドールはマットレスのような防着をつけている馬に乗ってくる。「トロ」は即座に角で馬を殺そうと、攻撃してくるがピカドールはその間を狙って、トロの盛り上がっている肩に槍を刺す。これは場合によって3回まで繰り返され(やりすぎると観客からブーイングがある)トロは激怒する。ピカドールの目的はトロを怒らせるだけではなく、トロの首の筋肉に傷をつける事によって頭が下がりトロが低いところを見るようにすることである。そうするとマタドールは「ムレタ」(マタドールだけが使うケープ)でトロの誘導がよりし易くなる。

ピカドールが引き上げた後2人のバンディレーロが六本の銛(バンデリーアス)をトロの肩に刺し込む。バンデリーアスは75センチ長さの棒

の先に魚釣りのような針が付いた物である。時にはこの六本のバンデリーアスをマタドール自身が打ち込む事もある。しかし猛進してくるトロの角を避けながら、バンデリーアスを背中に刺すことはかなりの技術と勇気が必要になる。それからは「ファエナ」と呼ばれるマタドールが中心の劇となる。戦う前によくこの「トロ」を誰かに奉げることがある。時として女性に奉げられることもあり、自分の「マンテラ」（マタドールの帽子）を預けるという行為によって表される。それ以外はマンテラをアリーナ上に置いておく。これはこれから戦うトロに表敬を示すものである。最初にトロに向かってムレタでパソを繰り返す。このときのパソはそれぞれ名前もありそれぞれの技能を要求する。たとえば、パソナチュラルではマタドールは左手でムレタを持ちトロを誘導して、何回か繰り返して体の近くを通す。マタドールの周りを回る状態で4-5回右から左に通した後、逆に左から右に戻すように危険な「ペチョ」（胸）のパソになると観衆は喜び「オー！オー！」と声をかける。このファエナ中にマタドールは牛の動きを完全に牛耳った事を示さなければならない。時としてトロの角の直前でムレタを自分の体の背後を通したりして、トロの角に対してまったく恐れていない事を見せる。しかし長い経験と訓練があっても、わずかな判断ミスとか気の緩みなどで、牛耳れなかった時はマタドールの怪我、あるいはそれ以上の結果になる。とにかく、闘牛の劇の前半はこのファエナである。その後の半分は勿論そのトロを殺すところである。

ファエナの決まった時間、5-6分が普通で時間終了はプレシデンテが合図をし、マタドールは付け人からトロの殺しに使う刀「エトーケ」を受け取る。このエトーケの先は少し下に曲がっているが、それは牛の肩の上から刺したときに下の胸に入り易い為である。

マタドールは牛を刺しやすい位置に誘導して、神妙に姿勢を整えて牛に向かい角を避けながら通称針の穴と呼ばれる両肩甲骨の間「クルス」にエトーケを刺し込む。正しく入ると胸深くに達し牛の動脈を切断するので、牛はまもなく死ぬ。しかし、牛の両足が揃っていない時などには刀が入る場所が数センチしか開かないので、刺した刀はよく骨にぶつか

り跳ね返る。その場合はマタドールはやり直しをする事になる。ファエナの内容もよくさらに一回のエトーケでトロを倒すと、マタドールは大きく称えられ、その場で切り取ったトロの耳を一つあるいは二つ与えられ、また非常に良かったと認められた場合には尻尾まで与えられる。その場合、マタドールは観衆の歓呼に答えてアリーナを一周して挨拶する。観衆からは帽子や花やケープが投げ込まれるが、時としてワイン袋「ペレーホ」が投げ込まれることがある。その時は勿論ワイン袋からワインを飲んでから投げ返す。

明らかにこのような儀式的な殺し方の意味はトロを単に屠殺するのとは全然違うものである。同じことなら肉工場は屠殺を見せる入場料を取る事だろう。やはりそれ以上の意味がある事になる。トロと人間の死と生命に関わりある劇とを感じる。マタドールは我々人間の代表で我々の英雄であり、その使命は神秘的な恐ろしい力の代表としての牛と戦って、退治することである。

2) エル・トロ

闘牛に使われる牛は特別な種類であり、スペインでは主に南のアンダルシアと北のサラマンカに飼育される。特に自分の縄張りに侵入しようとするものに気が障り、殺すか追い出そうとする本能が植えつけられる。闘牛に利用される牛は通常500キログラム以上で、時には600キロを超えるものもあるが、思い切って攻撃をする性格でなければならない。そして理想的な闘牛用牛は大きさ、強さ、速さとスタミナのバランスが必要になる。たとえアリーナの中まで入った牛でも、それらを兼ね備えていないのが判明するとファエナにならないうちに退場させられる。「トロ」と言うのは神への生贄ではなく、神（女神？）そのものの代表である、それにふさわしい資質を備えたものでなければならない。

牛は前史から神話の中でかなり活躍している動物である。特にクレタ島は牛関連の神話がたくさんある。ギリシア神話の中でゼウス神は牛に姿を変えて、エウロパをアフリカから奪いクレタ島に連れ去る。そしてクノッソスの王となった「ミノス」の父親になる。後にポセイドン神が

ミノス王に生贄のための白い雄牛を贈るが、ミノス王はそのすばらしい牛を殺すのが惜しくなり、代わりの牛を生贄にする。それを知ったポセイドン神は激怒しミノス王の妻（パシファエ）が其の白い牛に惚れるように呪いをかける。呪いをかけられたパシファエはギリシア神話の中の有名な技術士「デダロス」に頼んで牝牛に見えるような箱を作ってもらってその中に入り白い牛を口説く。その結果、上半身人間で下半身が牛という怪物を生む。その肉食牛の「ミノタウロス」を大きな迷路の中に閉じ込め、クノッソスに貢ぐ国から子供たちを集めて、餌として迷路に入れミノタウロスに食わせる。アテネ王の王子「テセウス」は自ら進み出て人質の子供たちに混じり、クレタ島に行きミノス王の娘「アリアドネ」の助けを得てミノタウロスを退治し、アリアドネと一緒に島から逃げる。

イギリスの考古学者アーサー・エバンス氏によってクノッソスから、何人かの子供たちが牛の背中を飛び越えている絵が描かれた壁画が発掘された。おそらくそれらの絵は後の神話の元になったのであろうが、描かれているのは牛への儀式の一部と思われる。牛はクノッソスでは神聖なものであったことは、その象徴の角があちこちの遺跡から発見されている事である。¹ また蛇を両手に持っている恐ろしい女神の像もいくつか出土している。これは地母神または大なる母の像で、中近東の農業社会でよく見られるもので、繁殖と力の象徴としての雄牛と関連があった。

古代エジプトでも牛は神聖なものとされていて、カイロ市郊外のサッカラには「アピス神」となった牛のミイラの大きな地下墓地がある。また、初めての英雄詩「ギルガメッシュ」の中に、神性のある一番古い牛との闘牛劇が出てくる。ギルガメッシュとエンキデュは、彼らを殺すためにスメールの女神イシュタルが天から寄越した牛を殺すというもの。一番古い牛の絵は2万年前のラスコーやその他の南フランスや北スペインの洞窟の壁画にある。この洞窟の壁画の牛はどのような役割があったかはっきりしていないが、当時の自然宗教に関連があったのだろうと思われる。ラスコーの洞窟から現在のスペインまで同一の象徴的な意味があるとは言いきれないが、たくさんの文化の中に見られる。あるいはほと

んどの農業文化の中で雄牛は神性を有する面があったと思われる。古代の人にとっては雄牛の力強さや繁殖力は神にも似たような感じだったであろう。その神性を授けられた雄牛は不思議なものに変わり、それは悪魔のようなものではなくエリック・ノイマンが「大なる母」に取り上げているものやユング博士の普遍原型の地母神やジョセフ・キャンベルの「英雄の旅」と「千顔の英雄」に登場する、人間が戦わなければならない神性を有する力としてである。牛の力は地母神と同じように、二つの面がある。繁殖力それは生命を与える力であり、大きく広がる鋭い角は生命を奪うものである。英雄とドラゴン（怪獣など）との戦いなど世界の神話の中に、ユング博士の言う普遍原型がよく現れている。それは人間が大なる母の嫉妬深い束縛から自由になるためのことである。

3) マタドール

闘牛士になるには敏感である事も力も必要だが、それ以上にトロを理解しトロの強さと弱さと本能を知らなければならない。もうひとつはマタドール自身が絶対的な自信を身に着けなければならない事だ。マタドールはファエナの中で「パソ」をいくつかやりながらトロの体に触ったり体のすぐ近くでトロの動きを止めて、背中を向けて観客に大きく胸を張り顎を突き出し見得を切り、自分が完全にトロを征服したと言わんばかりの劇をするが、これは儀式の一部である。たまに、一旦動きを止めたトロが突然ムレタに向かって突っ込んで来たりする時があり、マタドールが見得の途中で慌ててしまい、このパフォーマンスが滑稽になることもある。

しかし体も足も不動のまま500キロもの「トロ」の死の角と数センチ離れただけで、自分の胸の前を通すのには、やはり絶対的な自信が無ければ出来ないことだ。それでも完全に牛耳ったと思ったトロに、体を傷つけられた時にはマタドールとしての本当の試練になる。角に刺されたマタドールの中にはすっかり自信を失ってしまい、その後トロを牛耳ることが出来なくなり、そのため人気も失いマタドールを廃業したり、地方の小さい闘牛場にしか出場出来なくなる事がある。マタドールは目

前で恐怖の角を通す時に観衆に十分な自信を見せなければならないのである。闘牛をサッカーに例えるとマタドールはホーム・チームであり、そのマタドールが観衆（人間）の代理である。マタドールが負けると見ている観衆もその大きく暗い神性の力に負けることになる。少なくとも闘牛劇上、大変な悲劇になる。そのために、戦いの中で未熟な技術を見せたり、勇敢さや自信が無い態度が見えたりするとそのマタドールの以前の戦いぶりがよくても観衆は憤慨する。

マタドールになるには子牛を相手に技術を磨く事から始まり、長い見習い期間を経なければならない。シーズンオフの地方の闘牛場で見習いマタドール（ノビエーロ）の「コリーダ」（闘牛）があるが、入場料も安く観衆も少ない。ノビエーロはシーズン中には本物マタドールのバンデリーヤなどの従者として闘牛に参加する。本物のマタドールになるにはマドリッドの大きな闘牛場で試験を受けるが、本物のマタドールの保証人が必要となる。

1コリーダで闘牛士一人は、たいてい牛2頭と戦う。よく出来たと思われるときに耳一つ、より良かった時には耳二つ、かなり優れたと思われると耳二つと尻尾が与えられる。2005年のマタドールとノビエーロの出場数を比較すると一番はエル・ファンディで107のコリーダに参加して牛の耳207個が与えられた。二番のエル・コルドベスは65コリーダに参加し、耳65個が与えられた。一番のノビエーロ、マルコ・アントニオ・ゴメスは55コリーダに参加し、77個の耳が与えられた。二番のノビエーロは53コリーダで87個の耳を与えられた。スペインの闘牛のアフィシオナード（ファン）はノビエーロに甘いが本物のマタドールには厳しい。ノビエーロはAリーグではなくBリーグという気持ち強い。

闘牛のアフィシオナードは正しい劇を要求する。トロが戦意を見せない状態の時、あるいはトロ自身が決めた「安全地帯」から動こうとしない時はトロに対して不満を持ち、またマタドールのムレタ捌きや自分が危険を犯さないような位置に居てトロを誘導しようとする時にはマタドールに対して不満を示す。観衆が見るのはヨーロッパの中世期にあった道德劇のようなものである。² 生と死との戦いの中で人間は死に向

かって規則に沿って戦い抜くことが期待される。人間を代表するのがマタドールであるから、其れとの密接な関係を感じる。闘牛劇上でのマタドールは、みんなの代表としての正道を行く英雄である。

結論

闘牛が行われていない他の国々では、牛をいじめて殺すスポーツをけがわらしく、恐ろしい事と見ている。私自身はピカドールに刺されて肩から血を流す牛を見ることが好きではない。また闘牛のルールもかなりマタドールびいきと感じる。しかしスペインの観衆は戦意を見せて良く戦ったトロが、引きずられてアリーナから退場するときに声援と拍手を送る。そのトロが人間を征服しようとする神聖な力を発揮して、その役割を立派に果たしたことに対する敬意を示すのである。また同時に観衆は人間がその恐ろしい神聖な力に勝った事で大いに満足する。そして英雄、エル・マタドールにも大声援を送るのである。

-
- 1 現在スペインや南フランスやポルトガルでは牛を飛び越えるショーも在る。
 - 2 中世のイギリスなどで「道徳劇」、または「奇跡劇」または「ミステリー劇」と言われたものであり、キリストや聖人の話を劇にしてキリスト教を一般の人にわかりやすく伝えるための劇であった。

Matador, Professional Hero

Thomas Guerin

Foreword

In several previous papers I have examined the heroes of myth and the myth of the hero in ancient and modern times. Although the hero of myth, as in the Greek myths, is a rare and marvelous demigod, today's heroes are more frequent and not quite so divine in stature. There are few heroes by profession today, unless one accepts all soldiers as heroes as some politicians are wont to do. In Spain, however, the matador is a hero by profession rather than by his deeds. That is to say, he performs an act, which only a hero, a champion (in the former sense of "representative") of all the people may perform, killing a bull, but a bull that is more than just a bull. To understand this hero and his role in society we should examine the meaning of 1) the performance, killing a bull in a bullring; 2) the man, the hero who is charged with killing the bull, and 3) the bull itself.

The Bullfight

In Spain and several counties of South America, bullfighting is a national pastime. It can also be found in Portugal and southern France, where the bulls are fought by men, but not killed. (And therefore those fighting the bulls there are not "Matadors," since the term in Spanish simply means "Killer." (Spanish "matar" = to kill.)) People pay rather high prices for tickets to a bullfight, perhaps twice or three times what is asked for tickets to the opera. Prices vary in regard to proximity to the ring, the closer to the ring, the higher the price, and the location of a seat as to whether it is in direct sunshine, partial sunshine, or shadow, the shadow being the best seat in sunny, summer Spain.

What the people pay to watch is the ritual killing of perhaps six bulls by three different matadors and accompanying retinue. The crux of the custom of bullfighting is the killing and its meaning to the *aficionados* (fans). I purposely do not call bullfighting a "sport" since it is not really much of a competition, though

in one sense the matador and the bull are competing to kill each other. There are extensive reports on bullfighting in the newspapers in Spain, but not in the sports sections. The Spanish newspaper displays some hesitation as to where to place the bullfight reports; so they are usually found between the entertainment and sports sections.

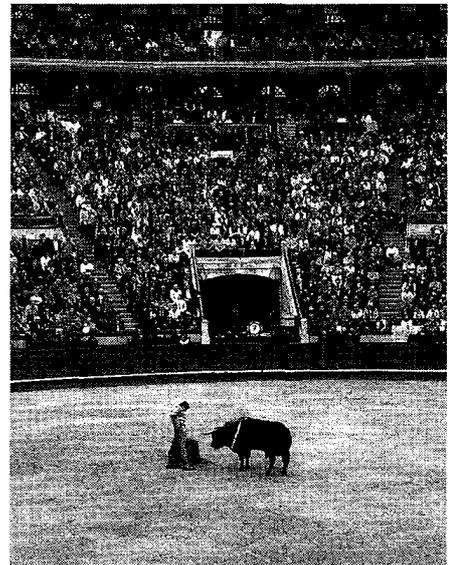
Bullfighting is a "ritual," and is recognized as such. That is to say, the actions of the bullfight are rigidly structured and each of the actions is intended to communicate something other than simply the action itself. It is a "drama" played out according to a script that allows impromptu actions only insofar as they adhere to the general outline. The most obvious meanings of courage and strength and determination must be clearly demonstrated, and the more subtle meanings of mastery or even desperation and fear, suggested.

The bullfight is a strict ritual and any variation detracts from the purity. The drama begins with a parade of the matadors and their retinue to a spot in front of the box of the president of the bullring, who is the one making the decisions necessary to the ritual. The first bull is let into the ring and the matador's helpers run it through some passes with the cape, mainly to observe the bull's characteristics; whether it hooks right or left, whether it is energetic in charging; whether it can hold its feet in the swift twists and turns of the attacks at the cape. The picadors then ride onto the scene, two horses, well protected by pads (not present years ago which used to result in much slaughter of horses) ridden by *toreros* (bullfighters) with long lances. The bull almost immediately charges the horse, doing its best to gore it, meanwhile the picador stabs the lance into the shoulders of the bull. This can be repeated up to three times, the bull being brought to complete rage by these wounds. The aim of the stabs to the shoulders is to weaken them and bring the head of the bull down so that when he charges his view will be lower and concentrated on the cape.

Then the *banderillas*, short hooked barbs, are placed two at a time in the shoulders of the bull. Usually there are six *banderillas* placed by two *banderilleros*, but sometimes the matador himself will place the *banderillas*. In any case, it takes

some skill to approach the bull from the front on the run and place the banderillas properly in the back of the bull without being caught by the bull's horns.

Then the matador himself comes to center stage. He will often dedicate the bull to someone in the crowd, to the president, or simply place his hat (the *mantera*) in the center of the ring as a sign of his dedication to the task to come. He then begins by running the bull through a series of passes with the cape, all of which have technical names that depend on the hand used, the direction of the pass, the position of the legs and/or feet, and whether the sword he carries is used to extend the cape. There are, for example, the "natural pass" where the cape is held in the left hand without the extending sword, and the bull led by the cape around the waist of the matador; the "*de pecho*" (*pecho* = chest or breast) when the bull is brought back across the body of the matador from a "natural", etc. In this section of the fight, called the "*faena*," it is most important that the matador keep the bull moving, and charging the cape. He must show his mastery of the bull by exposing himself to the horns yet being fully in command of the direction of the bull's charges. He often presents the cape from behind the body, seemingly inviting the bull to charge him directly, but the matador must be able to know the direction of the charge and guide it, close to his body, but not touching it. It is in trying to show his complete mastery over the bull that he sometimes comes to grief, the bull hooking away from the cape as the matador tries to pass it close to the body. Of course, the matador never really totally masters the mind of the bull, and mistakes are made.



Matador and bull face off.

The final part of the bullfight is, of course, the kill. After the determined time for the *faena* has passed, the matador goes to the side of the ring and receives the killing sword, or "*estoque*," which is bent a little at the end to make easier entry between the shoulders of the bull and down into the bull's chest. The matador

works the bull into a position he feels is best to make the kill, and then assumes a somewhat unnatural but rather ritualistic stance in preparation for the final lunge. He then lunges at and over the horns and hump of the bull, stabbing the sword into a small spot between the shoulder blades called the "*cruz*" or "*cross*". The sword, if placed correctly will cut deep into the bull's chest and rupture the aorta causing death within moments. The *cruz* in this method of killing, is only a few centimeters wide, if the bull's feet are equally placed laterally. If one foot or the other is forward, the space disappears and the sword hits bone and bounces out, or only partially sinks in, making the matador repeat the process. If the bull is killed with only one thrust, the matador is often in line for a great amount of cheering from the crowd and may, if the president decides him worthy, be awarded an ear or two, or in the extreme, a tail, which are cut off and awarded to the matador then and there. After which the matador makes a triumphant circuit of the ring, receiving the plaudits of the crowd, and occasionally hats or *pellejos* (wineskins) from which he may drink and throw back.

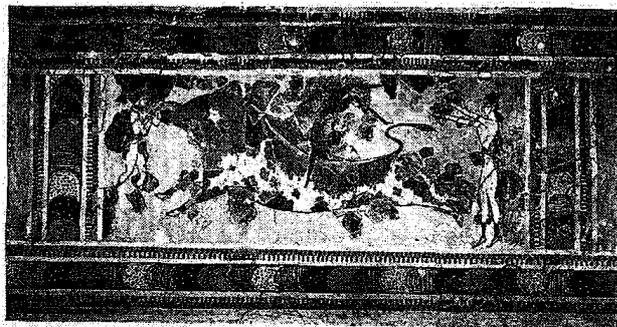
Obviously, the import of this ritual killing is more than simply slaughtering a bull. If that were of interest, any meat-packing plant could charge entrance fees to watch the beef being killed. There is an important element pertaining to life and death itself, not of the animal but of the human as well. The human, the matador, is representative of humanity, and his mission is to meet and destroy the bull that represents something other than a powerfully fashioned animal, but rather a certain mysterious power.

The Bull

In Spain the bulls used in the bullfights are a special breed, raised mostly in Andulasia in the south of Spain and Salamanca in the north. They are bred to be energetically obnoxious to all who intrude upon the area to which they lay claim. Those used in the bullring are supposed to be 500 kilograms or more in weight. There are several characteristics thought to be in the makeup of what is considered a good bull. One is complete abandon in attacking anything that tries to interfere

with it in any way. But size, strength, speed and stamina should be in good balance to produce a good bull for the bullring. Bulls who do not measure up to the standards for a “good” bull will usually be turned out of the ring even before the picadors arrive, their faults becoming evident in the first trial passes by the toreros. The bull is not really simply a helpless sacrifice to the gods. Rather, he is a kind of god himself, and therefore should not be of inferior stock that would not fit in the deadly ritual to come.

Throughout history and prehistory, the bull has been a major figure in mythology. The Island of Crete especially has various myths concerning bulls. The Greek Myths have Zeus taking the form of a bull and abducting Europa from Africa and bringing her to Crete where he lies with her and becomes the father of Minos, the future king of Knossos, then the greatest city on Crete. Later, Minos is given a white bull by Poseidon to be sacrificed to him, but Minos, admiring the white bull feels it a waste to kill and substitutes another bull for the sacrifice. This angers Poseidon who casts a spell on Pasiphae, the wife of Minos, and causes her to become enamored with the bull. She has Daedelas, the famous artisan of Greek myth, build her a cow-like contraption in which she can hide and seduce the bull. She does this, and later gives birth to a half-human-half-bull monster that is named Minotauros. The man/bull is put in the center of a great maze, again built by Dadelas, and being a meat-eating bull, it is fed human sacrifices in the form of young children taken as tribute from kingdoms around the Aegean. The Son of the King of Athens, Theseus, volunteers to go and kill the monster and joins a group of hostage children from Athens. He reaches Crete, and with the help of Ariadne,



Children leaping over a bull at Knossos circa 1500 B.C.



Advertisement for a bull leaping display in Spain, 2006.

the daughter of Minos, he kills the Minotaur and flees the island with Ariadne.

This series of myths were perhaps suggested by some of the artifacts uncovered by Sir Arthur Evans when he excavated Knossos in the early 20th century. One is a picture of one child in series, or several children together, leaping over the back of a charging bull.¹ This picture, or similar ones may have formed the basis for the story of the bull eating children, but it is more likely that it depicts a religious rite involving the bull, which was apparently sacred in Knossos, bulls horns being an omnipresent symbol about the castle as reconstructed by Evans. Added to this, the statues of deities found there are of a goddess brandishing snakes. These are representations of the Earth Goddess, or The Great Mother, who, in Asia Minor among agricultural societies was a major deity, “The” deity in some cultures. Further, she was often associated with a bull as a symbol of fertility.

Bulls were held sacred in Egypt, as well, where you can find the burial ground of the mummies of bulls in Saqqara, outside Cairo. The bulls mummified were considered avatars of the bull god Apis. The earliest explicit reference to a divine bull and perhaps to the first bullfight, is from the earliest known heroic myth, Gilgamesh, who, with his bosom pal, Enkidu, kills the Bull of Heaven sent by Ishtar, the Mother Goddess in Sumer at the time, to kill them. Of course, one may seek even earlier representations of bulls on the walls of Lascaux and other caves in southern France and northern Spain. The role of the bull on the walls of caves 15 –25 thousand years ago his hard to determine. Still, it would seem that the many animals depicted have some animistic purpose and are presumed to have a certain spiritual power.

It may not be possible to draw a direct line from the caves of Lascaux, to Asia Minor and Crete to present day Spain in regard to the symbolism of the bull, but it should be sufficient to show that many, perhaps most cultures, see a symbolism of something divine in the bull, simply because of the natural attributes of the animal, and have interpolated these into their understanding of a divinity. This view of the bull includes strength and fertility, and because of these perhaps, a certain threatening power. I do not wish to say that the bull is a representative of the devil, or evil itself. Rather it is the realization of some overwhelming otherworldly power suggested by Erich Neumann in his "*The Great Mother*," and by Jung in his universal archetype, and by Joseph Campbell in his "*Hero's Journey*," or "*The Hero with a Thousand Faces*."

The bull's power, like the Earth Mother, has two aspects. The Earth Mother gives life, nurtures it, but finally returns it to her womb. Likewise, the bull projects fertility, which gives life, and possesses at the same time a set of death-dealing horns, which take it away. Almost any myth that includes a hero fighting some dragon, sea monster, devil or ghost, is meant to represent the struggle that man encounters in freeing himself from the ever-jealous forces of the Earth Mother that gave him birth. It is this force that the bull represents, the Bull from Heaven sent to deliver the revenge of Ishtar, a mythical, but ever-present spiritual force intent on maintaining the power over its realm, including humanity.

The Matador

To become a matador requires not only a certain amount of agility and strength, but also a lot of understanding of bulls, how they act and react, their strength and weaknesses. It is the psychology of the matador, however, that sets him apart. He must be extremely confident in his attitude toward the bull. The matador shows an attitude of confidence, even hubris in his ability to make the bull do his bidding. During the *faena*, after he makes several passes and then brings the bull to a halt, he turns brusquely away from it, thrusts out his chest and gestures to the crowd with his sword, as if to say that he is in complete control.

This is, however, a part of the ritual, called the "*ornar*" in Spanish, which he must learn, but can sometimes turn ludicrous when he has not, indeed, mastered the bull at all, as it decides at that moment to make another lunge at the cape.

In other words, the aura of confidence the matador displays may be a learned habit, while the actual confidence in his own ability to read the mind of the bull is what qualifies him to fight and slay bulls. Without this confidence he will not be able to stand within centimeters of the bulls horns as it passes by without moving anything but his cape. Perhaps the test of a matador is the first time the horns of the bull do not go where he intends they should go, and he receives a wound from the horn. Many matadors have lost their hard-won positions and the ability to stand within reach of the bulls horns after the first wound, and they soon lose the crowds who can see this loss of confidence oozing from the stuttering steps made during the passes, and the hesitant killing thrusts. If he has not the crowds, his popularity drops and his agent can no longer find him fights, even in the rural areas of Spain.

Perhaps the demands of the public on the matador for confidence in the face of the vicious death-dealing horns of the bull can be deemed cruel. But the bullfight is not a soccer match, and the participants are not soccer players whose performance may amount to a win or loss for the home team. The bullfight is figuratively a deadly competition between humanity and threatening superhuman forces; a mythical competition acted out in reality: humanity represented by the matador, the opposing force by the bull. Although the *aficionados* of bullfighting do not specifically feel that the inept matador is not a worthy representative of them in opposing the bull, they certainly deride ineptness in the fight, no matter how well the matador has performed in the past and express a certain resentment at a performance which shows lack of courage or confidence.

The matador goes through an apprenticeship, practicing his techniques on smaller, younger bulls. In the off-season in Spain there are many bullfights by "*novilleros*," or novices, which are attended by fewer people, use smaller, younger bulls, and have considerably cheaper ticket prices. Many novices will work as part

of a matador's retinue during the regular season, running the bull with cape work at the beginning of a fight, or placing the *banderillas*. They may eventually reach matador status, if a senior matador will sponsor them at a major bullring, Madrid being the ultimate in bullrings in Spain.

The Spanish *aficionados* are indulgent in their evaluation of *novilleros*, but are considerably stricter in their attitude toward the matador. When the rankings of the top fifty *novilleros* and matadors are compared, the number of ears cut and received by the *novillero* is easily comparable to the matador. In 2005, the matador taking part in the most bullfights, who goes under the name of "El Fandi," fought in 107 *corridos* (*corrida*=bullfighting session) and was awarded 207 ears, which means he averaged nearly an ear per bull, (usually fighting two bulls per *corrida*.) The second-ranked matador, "El Cordobes" fought in 65 *corridos*, however, but received only 65 ears. The top *novillero*, Marco Antonio Gomez fought in 55 *corridos* and took home 77 ears, and the second-ranked *novillero* won 87 ears for 53 *corridos*. There were more than twenty matadors who received an ear less than 50% of the time, while only ten *novilleros* were that poor. There is a feeling among the spectators at a *corrida* of matadors that this is the big leagues, and for *novilleros* the minor league feeling is evident.

The true *aficionado* of bullfights demands that the ritual be carried out correctly, objects when the bull is not strong enough to put up a good fight, and when the matador stays too far out of harm's way when passing the bull, or at the killing. What they watch acted out by the bull and the matador is a sort of morality play such as those found in Europe in the late Middle Ages, in which the allegory should always be the same, the triumph of humanity over death. It is the matador who is the champion for the human side, while the bull champions the side of death and destruction. The matador is the hero and all the hopes of humanity rest upon him in this figurative drama.

Conclusion

Fighting bulls may be frowned upon by much of the world today as a

gruesome exercise in displaying the sadistic impulses of primitive culture. I myself do not really enjoy seeing the blood gush from the wounds in the shoulders of the bull after the picadors have stabbed it, and it sometimes seems that the rules have put a little too much of a handicap on the poor bull. But Spanish crowds always cheer a bull that has put up a good fight. A “brave” bull, one that has shown utter determination to murder the matador, is cheered by the crowd, even as it is dragged from the ring at the end of the fight. He is cheered as having displayed well the virtues that are expected of his role representing the powers that seek to subdue all humans. The crowd is satisfied that mankind has again triumphed over the threatening power, even as it did its best to test the ability and courage of the representative of humanity; the hero; the Matador.

* * *

Bibliography:

Campbell, Joseph; *The Hero's Journey*: Harper Collins; San Francisco, 1991

Campbell, Joseph; *The Hero with a Thousand Faces*: Harper Collins, San Francisco, 1972.

Hemingway, Ernest; *Death in the Afternoon*: Scribner; New York, N.Y., 1960.

Neuman, Erich; *The Great Mother*: Princeton; Princeton University Press, 1963.

1 Even today in Spain and certain areas in southern France, and in Portugal bullfighting also includes leaping over the back of the bull, much as depicted in the mosaics from Knossos.